



ガード下で深まる「新さっぽろ医師会」 —地域医療の要、震災避難者の医療の担い手として—

札幌市医師会厚別区支部 広報部長
さっぽろ厚別通内科 院長
杉澤 憲

厚別区は札幌市の東部に位置し、札幌市では面積が一番小さな区です。区は札幌市の副都心として開発が進み、中心部は「新札幌」と呼ばれ、JR、地下鉄はじめ交通接続の要所、札幌市の玄関口でもあります。また、東日本大震災の避難者は、6月現在北海道に2,839人、うち札幌には1,533人の方々がいますが、厚別区内にはその4割の約600人の方々が避難されております。北海道では被災された方々を一番受け入れており、被災された方々の健康問題にも最も間近で接する地域であると言えます。平成23年11月には札幌市医師会厚別区支部創立20周年記念事業として、原発事故や放射線障害などをテーマにした市民公開講座も行いました。

その地域医療の要である札幌市医師会厚別区支部は81医療機関（札幌加入）229名からなりますが、特に会員間の交流があり、佐々木孝支部長を中心に元気ある支部であると自負しております。

厚別区支部が元気な理由の一つに支部役員会のあとに誰でも気軽に参加できる夕食会があると思います。もう20年ほど続く厚別の伝統です。そこには支部長はじめ三役、大御所クラスの大先生から若い勤務医の先生まで自由に参加しております。役員会が終わった時点でお互いの声を掛け合って参加します。金曜の夜に毎回10名前後の不確定な人数を把握していつもの居酒屋に連絡し、スペースを確保して下さるのは総務部長の武井崇先生です。お店は医師会御用達ようになっており、最近では「医師会専用メニュー」まで考案されるようになっております。そこではさながら支部役員会2次会、JRガード下の「新さっぽろ医師会」とでも名称をつけたくなるような活発な交流をしております。内容は日常診療の科を超えた相談から、TPP、原発問題までさまざまです。

ここでの意見交流がきっかけとなり、支部役員会の議論を経て支部総会で厚別区独自に震災避難者を支援する医療の取り組みが提案、議決されたこともあります。意見の違いはあっても、「患者さんの不安をとるとというのが医療の大原則ですから、それを考えると当然医師会としてやるべきこと」（佐々木孝支部長）と、住民の側に立った視点で活動していこうという、支部長はじめ諸先生方の想いを直接聞き、

若い会員がそんな大先生方を身近に感じる場であるのが「新さっぽろ医師会」なのだと、私のような新参者は納得しました。

震災後2年を経過し、避難された方々においては、避難生活の長期化により、避難家庭の経済的な逼迫、精神的な抑圧が目立つようになってきました。健康に関する不安を多く抱えながら生活されております。しかしながら震災から2年以上経過し、関心が薄れてきているのも事実です。身近な医師会として関わりが一層求められていると思います。

今回役員交代があり、新しく若い世代の先生も参加してくれました。さっそく伝統の「新さっぽろ医師会」の交流を通して、彼らも厚別区支部を盛り上げてくれることと思います。

札幌市医師会西区支部 広報部長の小原です

札幌市医師会西区支部 広報部長
小原眼科医院 院長

小原 裕一郎

このたび、前任の滝沢先生より、広報部長という大役を引き継ぐこととなりました小原裕一郎です。今後ともご指導をよろしくお願いいたします。

まずは、支部役員会への出席、会議議事録の簡潔なまとめ、医師会雑誌への投稿募集などの従来通りの仕事をこなしていこうと思います。会員の先生たちにはご多忙のなか、さまざまな執筆依頼をさせていただきますので、何卒、ご協力をお願いします。

「その地域の先生たちがしっかり連携すれば、大病院に頼らずともその地域だけで、治療はできる」本支部所属の先生のコメントです。この課題の遂行は大変困難ではありますが、努力目標として掲げる必要があると小生は考えます。実際、遂行するためには診療設備、技術、経験の向上のみならず、地域の各病院の診療内容の情報交換が必要です。従来の業務に加えて、広報部として、具体的にどのような形を取れば目標達成できるかを考えていきたいと思っております。

今後ともご指導をよろしくお願いいたします。